

はじめに

3 R（廃棄物の発生抑制（Reduce）、再使用（Reuse）、再生利用（Recycle））に関する重要性について、市民、事業者、行政等に幅広く普及するため、3 R九州ブロック大会を企画・運営する。

平成 22 年度においては、九州地域に親しみのある焼酎に使われる「びん」に焦点をあて、リユースシステムの導入などを契機に 3 R の推進を幅広い層に訴えかけることにより、ごみゼロ社会の実現や循環型社会の形成に向けて各主体における取組の一層の推進を図ることを目的とする。

1. 「リユースびん推進シンポジウム」開催報告

(1) シンポジウム概要

平成 22 年 11 月 12 日（金）にかごしま県民交流センターA ホールにおいて「リユースびん推進シンポジウム」を開催し、鹿児島大学 法文学部 教授 原口泉氏の基調講演及び取組事例紹介として、環境省による事例報告のほか、ガラスびんリサイクル促進協議会 リユース部会 戸部昇氏、奄美市 市民部 環境対策課 環境保全係 主事 宮城久典氏から取り組み内容についてご紹介をいただいた。（詳細プログラムは後述）

後半は、鹿児島県内の取り組みとして、鹿児島県地球温暖化防止活動推進センター長 清水建司氏に県内の取り組み内容についてご紹介をいただいた後、原口氏をコーディネーター、事例紹介者をパネリストとし、「リユースびんを普及させるためになにができるか？」というテーマでパネルディスカッションを行い、リユースびんを推進していくための課題・方策等について議論をいただいた。

(2) 開催概要

- 名 称：リユースびん推進シンポジウム
- 日 時：平成 22 年 11 月 12 日（金） 14：00～16：40（開場 13：30）
- 会 場：かごしま県民交流センター A ホール
- 主 催：環境省九州地方環境事務所
- 共 催：鹿児島県酒造組合、鹿児島県卸売酒販組合、鹿児島県小売酒販組合連合会
- 来場者：約 70 人

(3) プログラム

【開会挨拶】

環境省九州地方環境事務所 所長 神田 修二

【講 演】

鹿児島大学法文学部 教授 原口 泉氏

【リユースびんの取組事例紹介】

(1) 「リユースびんの現状 ～動き始めたリユースびんシステム～」

ガラスびんリサイクル促進協議会 リユース部会 戸部 昇氏

(株式会社トベ商事 代表取締役社長)

(2) 「リユースびん普及に向けた取組」

環境省九州地方環境事務所 廃棄物・リサイクル対策課 課長 澤田 真信

(3) 「奄美エコマネー事業について」

奄美市 市民部 環境対策課 環境保全係 主事 宮城久典氏

【鹿児島県内の取組】

「リユースびんの普及に向けて」

鹿児島県地球温暖化防止活動推進センター 事務局長 清水 建司 氏

【パネルディスカッション】

テーマ：「リユースびんを普及させるためになにができるか？」

◇コーディネーター 鹿児島大学 原口 泉氏

◇パネリスト ガラスびんリサイクル促進協議会 戸部 昇氏

奄美市市民部環境対策課 宮城 久典氏

鹿児島県地球温暖化防止活動推進センター 清水 建司氏

環境省九州地方環境事務所 澤田 真信

(4) 講演内容・パネルディスカッションでの意見

1) 講演の要旨¹

① 鹿児島大学 法文学部 教授 原口泉氏

- 「MOTTAINAI」が、世界の合言葉となっているが、その鹿児島バージョンが「あったらし」である。リユースびん推進に向けた活動を、鹿児島から、九州から始めようということで、去年から精力的に進められ、全国に向けて発信されている。
- リユースびんを使うという環境問題について、日本人がそれぞれの地域でこれだけ努力をしているということは、国内向けよりも、むしろ全世界に、日本人のこれからの在り方を示していることになるのではないかと思う。リユースびんを使えば経済的にも少しメリットがあるという、インセンティブも必要である。
- それに関しては企業、行政、市民、3者がそういった方向へ持っていくような一つの取り組みをしていく必要がある。それは環境に対して、子孫に対して、これがいいのだという、1つの文化的な、地域文化の在りようとして教育的な機能を持っているということを重視しなければ、この運動を進めていく起爆剤にはならないのではないかと思う。
- 鹿児島での取り組みの中で、1つ見える形となりつつあるのが奄美地域での事業である。この島の人々は、災害に見舞われながらも、このリユースびんエコマネーというものを推進してくださっている。こうした島の方々の試みも、世界の人々が注目していると思う。世界の取り組みであって、我が国だけの取り組みではないということは、もう鹿児島の人自身をもって分かっている。このような取り組みをきっかけに、世界の人と会話をするということが、今、鹿児島の人、九州の人に求められている。これは、国籍とか、英語が上手だとか関係ない。それも、きちんと行動をやっているからということで、世界の人々の信用を得ることもできるのである。
- 20世紀社会には3つのポイントがある。1番目は、一般の庶民でも養生さえすれば長生きできる社会であること。2番目は、今度世界戦争をやったら人類絶滅をするという認識をみんなが持っている社会であること。3番目は、我々が推進しなければいけない、分かっているがやめていない、人間の愚かさのある社会であること。
- そのなかで一番大事なことは、資源を無駄遣いしない、使わなくていいものは使わないというリデュース、その次は使える限り使うということで使える限り使うリユース、その次が、致し方ないからリサイクルである。
- 薩摩切り子をはじめ、焼酎の五合びんにしても、割れにくくて頑丈という特徴がある。そういうところは、びんだって、人間と一緒にいる。日本のガラスびんは、養生さえすれば、何回でも使える、非常に優れた製品です。この日本のガラスびん文化というものを世界に広げるような心持ちで、各地域で取り組む時が来たのであり、これが新しいビジネスや仕事を興すのではないかと思う。

¹ p3～8は、ご講演・パネルディスカッションをもとに事務局にて作成したもの、すべての文責は事務局にある。

② ガラスびんリサイクル推進協議会 リユース部会 戸部昇氏
「リユースびんの現状 ～動き始めたリユースびんシステム～」

- 日本における容器包装の3R対策について、一番着手しやすいリサイクルから始まり、リデュース・リユースの対策は遅れをとっているのが現状である。びんを繰り返し利用するリユースの取組みについては非常に古い時代から存在したが、オイルショックのあった昭和48年以降、落ち込んでいる。循環型社会の優等生と言われる一升びんは、省エネ・省資源の代表的なものだと思うが、現在はそのような認知がされていない、忘れられてしまっているというのが現状と感じている。
- リサイクルシステムは上手くいっているが、リサイクルに要する費用は、最終的には消費者の皆さんが負担している。一方、リターナブルびんは社会的な費用を必要としないシステムである。
- このような状況を踏まえて、リユースというものをもっと考える必要があるということで、消費者団体の人たちが集まり、いろいろ検討したこともある。実際に自分たちでリユースをやる、ということで始まったのがグリーンシステムであり、びん再使用ネットワークというものである。生協が会員である再使用びんネットワークでは、約1,100万本のびんがリユースされている。非常に時間は要したものの、やっとここまで来たといえる。九州においては、グリーンコープが多種類のリユースびんを使っている。
- その他、リユースに関する取組みとしては、平成16年から南九州において900ml茶びんの統一リユースシステムがスタートしている。
- また、関東地域においてワタミという企業が、平成21年10月からリユースの取組みを始めた。これは4年前から打診をしていた事業である。
- ワタミでは、環境大臣と「エコ・ファーストの約束」を宣言しており、その中でもリターナブルびんについて明記している。居酒屋業界のトップランナーとして、自分たちが先頭を切るということで、地球温暖化防止、循環型社会構築に向けての取組みを約束している。
- 具体的には、「リユース社会構築のため、リサイクルさせていた日本酒のびんのリユースの取組みを促進する（2012年度に関東、甲信越、東北地域の全店舗でリユースを実施）」ということを謳っており、いよいよ本格的に始まる場所である。居酒屋業における環境戦略であり、取引先の蔵元からも参加したいという話が増え、今後広まっていくのではないかと考えています。
- その他には、Rドロップスという取組みがある。千葉大学の学生たちと再使用びんネットワークとが一緒になって、自分たちでびんを作り、それに中身を入れて売ってみようという取組みである。デザイン性の高いびんで利用されている。
- また、最近では、福島県郡山市において、大量廃棄されている720mlびんについて再利用を進めようと、Rマークびんを使用し、地域で回収、再使用しようという動きが出ている。
- これまで相当時間がかかったのだが、ここ1～2年の間に、このリユースの促進という動きが始まってきている。

③ 環境省九州地方環境事務所 廃棄物・リサイクル対策課 課長 澤田真信氏
「リユースびん普及に向けた取組」

- 環境省における南九州地域でのリユースびんの普及推進事業は、平成 15～16 年のモデル事業から始まる。具体的な内容としては、リユースしやすい統一規格のびんとして 900ml R マークびんを設計・製造、いろいろな企業の方に利用していただき、リユースシステムを普及させるという取り組みであった。現在、鹿児島県 4 社、熊本県 7 社、合計 11 社のメーカーに採用していただいております、一定の成果を挙げているが、採用メーカーは増えていないという状況にある。
- 平成 21 年度から、改めてリユースびん普及推進事業を開始しており、これは九州地方環境事務所と九州経済産業局が合同事業として実施している。鹿児島県の焼酎で利用の多い五合びんへのリユースシステムの普及を目指したものであり、まずは鹿児島を中心に焼酎リユースびんの普及拡大を広げていくということを実施した。
- 具体的な事業例を紹介すると、様々な関係者が一同に介するリユースびんの推進会議を開催し、情報共有の場とするとともにリユース推進のための方策を検討いただいた。
- 鹿児島県内の焼酎メーカーを訪問させていただき実情をお聞かせいただいた上でリユースびん利用を働きかけている。関心をお持ちいただいた酒造メーカーの方には、リユースした場合のコスト試算、環境負荷低減効果などを情報提供させていただき、具体的に検討する際の材料としていただいた。
- 消費者の方への普及啓発事業として、リユースびんに関するシンポジウムを開催、環境フェアにて出展・展示を行った。
- 空びん回収に協力してくれる自治体への支援ということで、奄美大島におけるびん回収の取り組みを支援した。
- リユース推進に向けた今後の方向性としては、消費者に向けた普及啓発の実施、また関係業界への協力要請を行っていくとともに、びんリユースを実施している事業者の取組紹介や PR を通じて、酒造メーカーへの情報提供とインセンティブの付与ということを考えている。平成 22 年度の具体的な事業例としては、平成 21 年度事業の継続・深度化ということで、リユースびん推進会議の開催、消費者への普及啓発を目的としたシンポジウム・環境フェアの開催、奄美大島で実施していただいている回収モデル的事業のフォローアップ、鹿児島県内でのびん流通の実態調査、酒造メーカーのリユースびん利用への意向把握、酒造メーカーに対する情報提供を実施している。
- その他のリユースびん推進に向けた取り組みとして、「平成 22 年度の循環型社会地域支援事業」に、奄美市の「NPO 法人ユーアイ自立支援の会」が採択されており、奄美地域の各島のびんも対象とした回収・リユースの仕組みづくり、ネットワーク構築を検討いただいている。

④ 奄美市 市民部 環境対策課 環境保全係 宮城久典氏
「奄美市エコマネー事業について」

- 奄美エコマネー事業は、地域通貨のシステムである。市民の方に会員登録してもらい、アルミ缶、一升びんを指定の場所に持参し、引き渡してもらうことで、地域通貨券に引き換える。地域通貨券は商店街等の買物で利用することができる。
- エコマネー事業にて回収されたアルミ缶は、リサイクル資源として売却、一升びんは、NPO法人や福祉施設で、回収・洗浄し、酒造メーカーに買い取ってもらっている。これらの売却収益を財源に、エコマネーを発行している。
- 事業は平成17年7月から開始しており、運営は、奄美市が直接実施しているわけではなく、参加団体の協力の下に、NPO法人・民間団体・行政から組織する「奄美エコマネー運営委員会」を設立して行っている。事業目的として、リサイクル推進による地球温暖化の防止であり、環境意識の向上、公共交通機関の利用促進、地域経済の活性化を謳っている。
- エコマネーというのは身近なところから始めることができる環境活動と認識しており、アルミ缶を分別すること、一升びんを分別すること、それを持ち込んでいただくこと、その行為がちょっとしたお小遣いになり、公共交通機関の利用促進につながり、商店街の買い物へも使えるというような環境への好循環を目的として掲げている。
- 他の地域では、地域通貨は上手くいかずに継続できていない事例が多い中、奄美エコマネー事業が5年間続けてこられた理由・ポイントとしては2点あると考えている。1点目は、NPO法人・民間団体・行政による協働作業であること。協働により、それぞれの特徴を生かしていることである。2点目は、行政からの財政負担を伴わずに実施している点である。奄美市からは奄美エコマネー事業に対して助成金等を出していない。行政に頼らない体制づくりがポイントとなっている。
- 平成22年3月に、九州地方環境事務所から空きびん回収用のP箱を支援していただいた。このP箱は、現在一升びんの運搬・保管・回収場所への設置に利用するとともに、大口会員への貸出しを行っている。また、一般家庭でも一升びんをたくさん飲まれる方に貸出ししている。
- P箱を使用することによって、酒造メーカーに引き取っていただく際、詰め替えをしなくてもよくなったといった作業効率の向上が図られた。酒造メーカーにおいても、P箱で運搬することにより、びんの傷が減少、再利用時の不良率の低下につながっており、大変喜ばれている。
- 一升びんではP箱の利用率が高いが、五合びん用、二合びん用については、まだまだ利用ができていないのが現状である。このP箱を利用して、業務店で使われる五合びんもエコマネー事業の回収ルートに載せることができれば、よりリユースが促進できるのではないかと考えている。
- エコマネー事業の課題としては、5年間続いている事業ではあるが、まだまだ認知度は低い点がある。また、会員とそうでない方との温度差も大きい。運営委員会で話し合っ、エコマネーの認知度向上のための広報活動の展開、換金率の検討、事務局運営の充実・体制の見直しを図りたいと考えている。

⑤ 鹿児島県地球温暖化防止活動推進センター 事務局長 清水建司氏
鹿児島県内の取り組み「リユースびんの普及に向けて」

- センターでは、地球温暖化の普及啓発や活動支援、地球環境を守るかごしま県民運動の運営、その他、各種情報提供などを行っている。県内には約 540 人の地球温暖化防止活動推進員、兼、県民運動推進員の方がいるが、毎月 5 日をエコライフデーとして、電気・水・燃料などの省エネ活動やエコドライブ推進などに一緒に取り組んでいる。
- このような活動において 3R も取り上げており、びん、R びんについて見直すというテーマでキャンペーンを実施、様々な勉強会などを開催している。
- 推進員から「地域でびんを使おう、リユースに協力しよう」と地域に呼び掛けていただくことは、効果的な普及啓発の手段と考えている。実際に推進委員の方と学習会をしたところ、まずはびんを使おうという機運を高めること、リユースできるびんがあることなど、認知度を上手に向上させていくことが 1 つの課題であると実感している。
- びんの 8 割が業務用とのことだが、お店で提供されるものも、それを消費するのは市民、県民、国民であり、消費者である皆さんが選択するという機運を高める必要がある。
- 県としてもいろいろな事業を行っている。県民運動というようなソフトの仕組みを活かして、R びんを含めた、環境にやさしいびんの利用を促進するための周知や、エコスタイルの普及・PR を進めている。また、かごしま環境フェアなどの機会を活かして、県民の皆さんに伝えていくような活動をしている。
- 県内の普及啓発の方法として「CO₂・CO₂ (こつ・こつ) と減らす かごしまアクションコンテスト」を実施している。一昨年は大口酒造が県代表として全国大会に出場、県内はもちろん、全国的にもリユースびんについて考えようという機運は広がったと考える。
- 普及への提案として、いろいろな方からの意見を整理する形で、事業者と一般ユーザーの取り組みに分けて紹介する。
- 事業者は、「びんを使うということがエコな活動ということをアピールを」「ぜひ一斉に踏みだしていただき、全部が R びんになれば迷わない」といった意見が挙げられている。
- また「いろいろなリターナブルびんを開発し、ユーザーが選択できるように」「びんは格好いいといったキャンペーン」、「ブランド商品の量り売り」ができればよい。また、例えば、ビールのように、リユースびん商品にはシールを貼って、「〇枚集めて応募すれば、お湯割り錫カップをプレゼント」といった取り組みも良いかも知れない。エコな取り組みをすると儲かるビジネスに、びんの取り組みがつながっていくといい。
- 一般ユーザーにおいては、「一人一人が「びんはエコだ」という認知度を上げる」「びんを大事に使うことや、傷を気にしないといった教育普及のキャンペーンが必要。」といったことや、「リユースできるびんと一目でわかる表示」と、それに加えカーボンフットプリントのように、見える化、「CO₂を〇〇g削減できます」といったメッセージがあればよいのではないかと。
- また、回収という観点では、集団回収を推進するような仕組み、例えば、奨励金や回収マニュアルといったことも必要だと考える。

2) パネルディスカッションでの意見

(リユースびんを推進のために何をなさなければいけないのか)

- 消費者、生産者、流通・販売、この3者が揃った取り組みの形ができつつある。今後1～2年で相当変わっていくのではないか。「我々の地域でもやってみよう」という動きが出てきており、今後に期待していきたいと思っている。

(消費者からの動きについて)

- エコマネー事業は、消費者の話であり、身近なところで環境活動と経済活動が両立できるという点に気づいていただき、市民の方に浸透していけたらと思う。
- 温暖化防止の取り組みを地域から発信するのはとても重要。温暖化防止には、リユース促進、廃棄物削減ということも大きなポイントになる。このリユースびんの取り組みが温暖化防止に貢献できるという点を全面に出してPRしていくのも1つの方法かと思う。
- 地域で核になってくださるような方々に期待したい。

(リユースびんを普及するためのメッセージ)

- 業務用のびんについて、ビールびん、一升びんは再使用できるが、それ以外は、いわゆるワンウェイびんとして、リサイクルされる。ワンウェイびんを少しでもリユースしていく方法を、考えていく必要がある。今後、企業・事業者は、自らがリユースの仕組み・ルートを構築していくことが役割ではないかと思う。
- 鹿児島でも、九州各県でも、やはり焼酎を愛する文化というものがある。その焼酎を愛する文化と、さらにエコであるという点を重視し、酒造メーカーにも協力していただく必要があるが、エコマネー事業としては、その焼酎を愛する文化とエコ活動というのを結び付けながら、今後も展開していきたいと思っている。
- 若い人は、ファッション性、自分のこだわりという点で、銘柄なりメーカーを選ぶ傾向が出てきているように思う。そのなかで、リユースびん、エコという観点で銘柄が選ばれることが増えてくる可能性は大いにある。そのためには、我が社の製品はこういう意味でエコである、という点をPRしていただくこと、さらにびんを見ただけでも分かるようにする、といったことを是非ご検討いただきたい。
- 環境省の本省でも、リユース促進に向けた調査事業に取り組んでいる。そのなかで、ガラスびんのリユースについての検討も含まれている。全国的な動向も含めて、期待していきたい。また、鹿児島での焼酎びんリユースの取り組みが中央を動かすようなことになれば非常にありがたいと思っている。引き続き、関係者の皆さんにご協力を頂きたい。
- 江戸時代には古物商が元気であり、ろうそくの最後の油を集めて、また新しいろうそくにするという商売も成り立っていた。いろいろなアイデアを身の回りから出していくということが、新しい循環型社会をつくる上で非常に役に立つことじゃないかと思う。このシンポジウムが発展的に続いていくことを願っている。

(5) シンポジウムの様子



会場の様子



受付、リユースびんやP箱の展示の様子



環境省 挨拶



原口先生 ご講演



戸部氏 事例紹介



宮城氏 事例紹介



清水氏 取組紹介



パネルディスカッションの様子